

「巻き込まれ親父の女難」

作 藤次郎政秀

●プロローグ、誰だ？この依頼主は？

男屋ガンスミス工場…

「准尉、お客さんのリボルバー拳銃。メンテナンス終わりました」

「おうAM、ご苦勞様」

「…四四マグナムなんて珍しいですね！」

「四四マグナムを撃つ人は、俺の記憶だと、映画のA国の刑事と某有名アニメの主人公の相棒くらいだ」

「それ、両方とも架空の人ですから…准尉(笑)…それにしても、四四マグナムなんて誰が使ってるんですか？」

「受注伝票見て見ろ」

「どれどれ…A国大使館、”HC”…まさかね」

と、驚くAMにHGは、自分がメンテナンスしている古い拳銃を指差して、

「俺が今、分解掃除している小型拳銃の受注伝票見てみな」

「…E連邦大使館、”JB”…嘘でしょ！いくらなんでも、世界的に有名なスパイ映画の主人公と同名のイニシャルなんて…そもそも、この依頼誰から伝手ですか？皆大使館関係者じゃないですか！伝票もイニシャルしか記載していないし」

「言わなくとも解るだろ？」

とHGが困った顔をして言うと、AMは

「MZ嬢ですか…、あの人らしい…」

と納得した。

「四四マグナムは両手でホールドしないと、とても撃てないな」

と言って、H Gは銃を構える仕草をする。

「そうですね。自分も両手じゃないと…」

「撃った事があるんだ」

「A国に居た頃に、シューティングレンジで」

「俺も、Y市銃砲試験場でのマグナム弾講習の時くらいかな…両手でもキツイな」

「自分は三五七マグナムなら、片手で撃てます」

「お前の腕の筋肉を見たら、撃てそうだな」

「それでも、准尉に体術で勝てませんが…(笑)」

「体術は、相手の体重移動と関節の動く逆の方向に技を仕掛けるからだよ。マグナム弾の拳銃は関節が動く方向に反動が来るから抑えるのに苦労する」

「でも、関節の逆方向にマグナム弾撃った反動が来ると、関節が壊れますね」

「そうだな」

「准尉なら、三五七マグナムなら片手撃ちが出来るのでは？」

「やった事無いなら判らん…今度Y市銃砲試験場に行ったら、やってみるか…」

「いけますよ、以前M Pの散弾銃をM Pが片手で撃ったのを真似て、准尉が撃ったら的に当たりましたから」

「思い出して言うと、」

「そーいや、こいつの試射どうする？」

「自分でいいですか？」

「構わんぞ」

「ハイ」

と言って、A Mは喜ぶが、H Gは

「あれ？四四マグナム弾なんて、ウチにあったか？」

「…准尉」

●双子

別の日、男屋ガンスミス工場…

「君ねえ…こんな所でサボってるんじゃないよ」

とH Gが呆れて言うと、

「いいじゃないですか…今、お店暇なんですし…」

と言って、折り畳み椅子の背もたれを前にして女給服を着て座っているB Xが言った。

「君も変わってるね…こんなオッサンに興味があるなんて」

とH Gがわざと言うと、B Xは口を尖がらし、

「違いますう。ボクは機械や銃を見るのが好きなんですうー」

「そうかね、機械いじりが好きかね」

「ウン。機械油の匂いが好きだよ。銃もね」

「銃が好きなんだ」

「うん」

「そうか、そうか…」

と、H Gがニコニコして頷くと、B Xが

「？」

と首を傾げて不思議そうにH Gを見つめているのを横目で見たH Gが

「どうした？」

と声を掛けると、B Xは

「H G社長は、機械や銃が好きな女の子について、変に思わないの？」

と訊ねた。

「なんで？」

「いや、この国に来てから、機械や銃の話をすると、『はしたない』とか『変な趣味』と言われるからさ」

と言うB XにH Gは

「…それはね、私の弟子達に女性が多くてエージェント任務をしているからかな？」

「弟子？エージェント任務？」

「そ、弟子…今は任務で殆ど出払っているけどね…皆ボディーガードとか自警団とかの任務でね。あとここでガンスミスの作業をしていたりね」

「そうなんだ」

「君はKお嬢様の学友だろ？…確かI国留学生とか…お国は大変だね」

「うん…パパがボク達の身の安全を図ってこの国に留学させたんだ」

「そうだったのか…ご両親は？」

「ママは、ボクらがハイスクールに通って居た頃、爆撃で死にました…パパは、祖父母の農場を継いだんだけど戦争が激化して農地は砲弾や爆弾で穴だらけ…向こうの友達の農場では畑を戦車で踏み荒らされた挙句に今では野菜の代わりに地雷が埋まっているよ」

とB Xが平然と言うと、H Gは済まなそうに

「ゴメン、ヤな事聞いちゃったな…」

と言った。H Gと同じ反応は、色々な所で見てきているので、B Xは

「いいですよ。この国も二十年前までは戦争してたんですよ」

「そうだね、私も戦地に行ったよ。この国は昔から、度々周辺諸国から攻め込まれていてね…小さな島が大陸沿いに点在している国だから…隣国との和平条約締結後も、隣国の反政府組織からの侵略が未だに続いているし」

と、HGは遠い目をした。それから、思い出した様に、

「銃に興味があると言ったね。撃った事あるの？」

「うん、今の情勢だから、国に居た時は護身用に持ち歩いてた。射撃の練習はウチの農園でしていたよ」

と言うと、HGは

「じゃ、今度射撃についてアドバイスしようか？オジサン、ガンシューティングのインストラクターもしているから」

と言うと、

「ホント！」

と、BXは喜んだ。

「お姉さんも一緒にね」

「ありがとうございます」

嬉しそうにしているBXにHGは、

「君は、大学で何を専攻してるんだっけ？」

「精密機械工学です。ちなみに姉は農学部です」

「なら、機械が好きなのも道理だね」

「そうだよ、でもボクは職人が好きなんだ」

「やはり、オッサンに興味あるじゃないか」

「…買いかぶりすぎですよ」

と言って、BXは苦笑いをした。HGは念のため店内に居るTTに確認のため電話すると、店内に客は誰も居ないとの事。

「本当に客が居ないんだ…内線電話要らん…」

「でしょ！だからもう少しここで見学させてね」

B XはH Gの作業を面白そうに見ていた。

A XとB X…この双子の姉妹は、I Yの妹のB Kの学校（ちなみに、現在B Kは大学生です。作者）にI国から留学して来たそうで、B Kとは大学のサークルで友達になったそう。

I Yから聞いた話によると、B Kの大学進学理由が、本人曰く「姉上様と違って、私は格闘技とか出来ませんので、頭脳労働で姉上様を助けたいです。将来K M（経理担当）様の片腕となり、白山亭と碓屋を切り盛りいたします」と言つて、Y市国際大学の経営経済学部に入学したそうである。

I国から留学して来たばかりで右も左も分からないX姉妹はB Kと仲良くなり、B KからH GにX姉妹をアルバイトとして働かせてくれと言つてきた。

H Gは以前から、一般の人達が白山亭の女給服を着たいばかりに募集もしていないのに、アルバイトに自分を売り込んでくる女性達が来るのにうんざりして「縁故の紹介状が無い者は、アルバイト応募お断り！」と言う脅し文句をレジの後ろの壁にある『白山亭の歴史』のパネルの横に張り出していた。

X姉妹はB Kの紹介なのであるが、B K本人と知り合つたばかりの友人が縁故になるのかとH Gは悩んだが、弟子のI Yの妹と言う事と、B Kが高校時代から長期休みの間にアルバイトをしていて、女給の経験があるのと、今やI Yの友人であるI Mとその所属する芸能事務所の女性アイドルやタレント達が、白山亭の女給服を着て一日店員とかのキャンペーンをしたり、白山亭内のステージの上で、女給姿でライブをやったりした例があるので、縁故を勝手に拡大解釈してI国から来た銀髪碧眼の双子をアルバイトとして雇う事にした。

当のB Kは女給として優秀（※）であり、客の雑談にも気さくに応じ、その知識も広く人気が出た。B KがI Yの妹と判ると「あんたのお姉さんは、冷たい態度をとって話しづらく

…それが面白いのだが、あんたは暖かくて知識が豊富で話をしやすい」と褒められる。それは、I Y 本人が未だに根暗で人見知りが、まだ残っているせいなのであるが、当の B K 本人は「姉上様はクールで素敵な方ですよ。私などまだまだ…」とニツコリと笑って謙遜している。

※白山亭の女給には、ある程度の品位と知性が必要になる。それは、女給がただのウェイトレスでない事を意味している。客との気軽な雑談にも応じられる知識…それは、天気の話から始まり、歴史・政治・経済・世界情勢等の知識や他にファッション・食べ物・雑学等の知識とウィットにとんだ会話力が必要になる。でも、その全部の知識を常に頭に入れなければならぬかと言うと、そこは、心配ご無用…解らなければ話している相手に聞けば、大抵は教えて貰える。如何に相手に気持ちよく話して貰えるかのテクニックがあればいい。

それは、ミルクホール白山亭の時代からの伝統で、女給の仕事は給仕と客との雑談で席を盛り上げ、その後、娼館碇屋にしけこむ…との流れになっていたからである。

今の世では法律により、娼館碇屋自体が廃業し、しけこむ事は出来なくなったが、客との雑談で楽しく喫茶をしていたく伝統は残っている…今の時代となつては、ミルクホール白山亭時代を知らない若者等が、中には勘違いして女給にストーカー紛いの行為をする事があるが…(港町水上警察署の捜査官の K J はそうじゃないと思う。作者(汗)、そう言う事もあり、白山亭では自身の身を守ったり、対処できる人材…警察官とかをアルバイトに使っている。

なので、白山亭の女給はこの国でウェイトレスと言う言葉が定着する前から、女給と呼ばれているが、別の意味でも、ウェイトレスと呼ばずに女給と呼ばれる。

こちらの世界のメイドカフェに近いものがあるが、こちらの世界でもかつてのミルクホールには、新聞・雑誌を店に置き、客に無料で読ませていた時代がありました。作者

H Gと話をしている最中に、B Xは不意に、店の方を向いて

「オッと…お客さんの様だ」

と言うと、H Gは

「分かるのかい？」

「うん…なんとなく…姉のAが感じたことをボクも感じるんだ。その逆もあるよ」

「双子って便利だな」

と、H Gが感心して言うと、

「そうでもないよ、姉がお腹がすくとボクが空いてないのにお腹が鳴るなんてよくある事だし…」

と言った。

「それは、興味があるね」

とH Gが方眉を挙げて言うと、

「面白いとは言わないんですね」

意外そうな顔をしてB Xが言う。H Gは素直に

「双子の異次元での意思疎通…て言うか…そういうのに興味があるね」

と言って、B Xの方に向き直ると、

「片方が、お腹が空くと、もう一人はそうでもないのに腹が空く…と言う事は、逆に片方が満腹になるともう片方が空腹でも満腹に感じるってことだよね」

「…？」

H Gが話している意味が理解できなくて、B Xは首を傾げる。H Gは

「いくらお腹が空いても満腹感で食べられない空腹の片方は、飢えてしまうじゃないか…おかしくない？」

「はあ」

B XはH Gの話している論理が理解できずにいた。

「…だから、二人揃って食事でも睡眠でも勉強でも一緒にしないと、大変な事になる…だから君達のご両親は、二人分け隔てなく常に一緒に行動させたのではないのかね？あたかも二人が一人の子供であるように…」

「…」

「離れて暮らせないと言う事だろ？」

とH Gが言うと、なんとなくB Xも（そう言えば…）と心当たりがあるので、

「はい」

と答えると、H Gは

「今の内から、離れることをお勧めするよ。恋愛をしたり、お酒を飲んだりしたらもっと大変な事になるよ」

と言った。

「大変って？」

B Xが聞き返すと、H Gが

「空腹だけで、そうなるんだ…そろそろ、身も心もそれぞれ別の人格だと思わないと、この先、生きていけないとオジサンは考えるんだけどね」

「はあ…」

● M Z 襲来

B Xが男屋でH Gと話していた頃…

「今日は、A M様いらっしゃるかしら…」

運河を跨ぐ橋を渡りながら、M Zは期待に胸を膨らませていた。

最近、白山亭に電車を使わず車で来店する客が増え、度々白山亭の前の通りが駐停車禁止にも関わらず店の前に車を止めてコーヒーを飲む輩（あんただよ！M Z（怒）作者）が居て、それが、外交官ナンバーの車なので、取り締まれる事が出来ず、港町警察署から苦情を言われたH Gは仕方なく、自分達が借りている白山亭の脇を流れている運河の反対側にある駐車場のスペースをいくつか借りて、白山亭の駐車場として解放した。

「いらっしやいませ、ようこそ白山亭へ…M Z様」

M Zが白山亭のドアを開けて応対したのは、I Yの妹のB K…それを見たM Zは

「あら、Kお嬢様。今日はアルバイトですよ？」

「はい、大学に進学して、履修している科目の合間にかですが…自宅より、こちらの方が大学に近いので…」

「相変わらず、お可愛らしい事…I Yさんも、こんな可愛らしい妹がいて、さぞ鼻が高いでしょう！お二人で店内に居る所をいつでも見たいですわ」

「姉上様は任務で出かけておりますよ」

「あら、そうですの？」

「だから、私が姉上様の分も働きます」

と言って、K Bはガッツポーズをした。

「なんて、けなげで姉想いの妹さんなの？おねえさん感激しちゃう」

と言って、M Zは泣く真似をした。

B Kの案内で店内のバーカウンターの席に座ると、

「いらっしやいませ、M Z様。何にいたしますか？」

と、この頃、頻繁にA M目当てで来店するので、多少嫌味を込めて、T Tはメニューを広げてM Zに提示する。

「白山亭オリジナルコーヒーとA M様を…」

「はい、白山亭オリジナルコーヒーですね…あとAMですが生憎切らしまして…」

とTTがシレつと返す。

「えっ？」

「先約があり、任務に就いております」

「あの…、どちらに？（また、AM様と入れ違い？）」

「守秘義務なのでお話しできません」

と澄ました顔で答えるTTに

「そんな〜」

この頃、TYとIYは、CEとIMの出演する時代劇の撮影で、K府県領地の撮影所に詰めていた。この任務、本来はTYのみの契約が、IMの我儘でIYが巻き添えを食らった。

本来のボディガードの任務以外に、向こうでは、IYのガンスミスの腕とTYの剣術の腕が買われ、CEとIMに殺陣と射撃の指南、撮影で使う銃器のメンテナンスをしていた。

AMはこのところ頻繁に帝都に來ているO県領地知事OTの警護に出ていた。

MPはY市国際大学のPA教授の依頼で、MPは学会誌に投稿するD国語論文作成と警護の依頼で、PA教授…結婚して今は、DA教授なのだが、学会では旧姓を使用している…の新婚家庭に泊まり込んでいる。教授からは「D国の方が碇屋に入られて、翻訳が楽だわ」A国語も出来るし、理系の知識もあるし」と言って喜ばれている。それに加え、教授の開發した素材を元に商品開發をしている夫のDB氏のベンチャー企業が忙しく、DB氏の帰宅がままならないため、IAには、白山亭と碇屋ガンスミスの勤務時間の間に教授の愛犬Wとその父母兄弟達の世話を依頼されていた。

HGとSKとHYは、男屋のガンスミスで、KTに触発された港町水上警察署のMSとAKに「特別銃器携帯・使用許可証」の取得講習をしているし、また、HYは店内でアルバイ

トを指揮しながら、相変わらず隠れて壁にもたれて昼寝をしている事が多かった。

MZはバーカウンターに居るTTとHYに

「この前のF県領地の旅行では、AM様はHG社長のお傍について…いつもはHY様の立ち位置と思いますが、どうお思いですか？HG社長の懐刀のお二人は？」

と、旅行の時にAMがHGに側にいて、HGにあれこれ聞いていて、MZが取り付く島もなく放っておかれたので、不満による苦情の代わりに、TTとHYに訊ねた。TTとHYはお互い顔を見合わせ、

「AMは、あの旅行で積極的に碇屋エージェントの創業のきっかけを学ぼうとしていたから、准尉も彼の質問にはキチンと答えているし、教えたりもしてたわね」

とTTが言うと、HYが

「F県領地に旅行に行った最終日にC国反政府組織のアジトを襲撃した時の事覚えてます？」

「はい」

「准尉がアジトの雑居ビルの裏口配置にAMとあなたとMPを配置したわよね」

「はい、そうですが」

「あれ、今までの准尉なら、あそこにはTYを配置するの、配下にMPとAMとね」

とHYが言うと、

「はあ…」

「あなたも多分知ってると思うけど、こういった襲撃では裏口って重要よね」

「そうですね」

MZも、D国エージェント機関DSFの一員なので、それくらいは理解できる。

「TYはこういう場合は適任者なの、それをあえてビルの側面に配置して、裏口にAMを当

てたのは、准尉が次のリーダーを育てるためよ」

「…」

「准尉は、A Mに将来の碇屋を任せようと考えているのよ」

「エッ？（A M様が次の碇屋を担うの？）」

「わたしだっていつまで、エージェントやる事ができるか分からないし、准尉ももう歳だし、准尉やわたしが働けなくなっても、碇屋を存続させるには次世代のリーダーが必要だと考えているはずよ」

とH Yが言うと、

「そうね…私もいつまで准尉のお役に立てるか…」

とT Tがしみじみと言うと、H Yが

「わたしは、A MとT YかI Yが結婚して跡を継いでくれると嬉しいな」

と嬉しそうに言うと、T Tも、

「私もよ！」

と応じた。

「エー！（碇屋のトップの二人はそんな事考えていますの！）」

とM Zが、H Y達が日頃考えている事を知り驚いた。

その時、いつもの席で聞き耳を立てていたK Jの耳が心なしか大きくなり、こめかみがピクツとする。

「A Mに准尉のしたたかさと、えげつなさを加えたら、文句ないわね」

「…うーん、私は『えげつなさ』はあんまり加えて欲しくないかな」

と、言い合うT TとH Yを他所に、M Zは（もし、A M様とお付き合いできる事が出来たら、

沢山の小姑がついて来るのね…）と深刻に考えた。

M ZはどうしたらA Mに近づけるか思案して、ふと白山亭に入ってくるときに、いつものように入り口のカウンター席に陣取っているK Jの事を思い出し、M ZはK Jを捕まえ、

「あなた、以前H G社長の弟子入りテスト受けましたわね」

と詰問した。職務柄、取り調べ等で詰問する事には慣れていたが、逆に詰問され、また、M Zのキツイ口調に狼狽えながら、

「はい、そうですが何か？」

「どの様なテストをされましたか？答えなさい」

「M Zさん…怖いですけど…」

「いいから、答えなさい！」

と言われ、K Jは仕方なく、

「H G社長の入門テストは、まず射撃…拳銃ですね。それから、体術・組手いずれでもいいから、H G社長の弟子…わたしのときは、M Pさんでしたが…を倒す事。それからH G社長と戦ってH G社長を認めさせる事です」

とK Jが怯えながら言うと、M Zは（射撃には自信がありますわ、M Pの相手なら…なんとかなりそうですし…最後にH G社長のお相手…？あのM Pが“勝てない”と言っていたので、勝てそうにありませんわ）と考えて落ち込んだ。

M Zがバーカウンター席に戻ると、

「あのさ、Kちゃん」

K Jが近くを通ったB Kを呼び止める。

「何でしょうか？」

「お姉さん、どこに行ったか教えてくれない？」
と、尋ねると、

「姉上様は、任務で出かけています。教えることはできません…それに、私を“Kちゃん”

等と気安く呼ばないでください！HG社長を見習って下さい！（姉上様が嫌っている人なので、お留守の間に馴れ合いはしたくないですわ）」

とピシヤリと言われた。

「えーっ（IYさんの妹だから、キツイなあ…そりゃ、HG社長やTTさん達は”Kお嬢様”と呼んでいるけど、IYさん同僚のIAさんとか、友人のIMさんとか…アルバイト仲間のMSやAKは”Kちゃん”って呼んでるのに…(泣)」

●MZ迫る

「ただいま帰りました」

と、白山亭の扉を開けてAMが入って来た。

男屋でガンスミスの仕事を終え、着替えてバーカウンターに席に座り一服しているHGに向かって軽く会釈する。

「お帰りAM。首尾は？」

「いつものように恙無く…OT殿下からは、先日の件も含めてお礼のお言葉を頂きました」

「そうか、ご苦勞様」

と、任務の報告が済んだところを見計らって、今まで店内で粘っていたMZが

「AM様、お帰りなさいませ」

と満面の笑みで出迎えるが、AMはよそよそしく、

「MZ様、いらっしやいませ」

と返す。MZは身悶えして

「ウン…もう、そんな他人行儀な…MZと呼びつけにして下さい」

「…(汗)」

「一緒に旅行した仲じゃないですか」

M ZがいつもよりA Mに迫っているの、H Gは(M Zの奴、今日はヤケに積極的だな…このところ遭えない事が多かったからな) と思い、

「A M」

「何ですか准尉」

「今日はもう上がりだろ」

「はい…お店が忙しければ、自分も接客やりますよ」

「よく見て見ろ、これで忙しく見えるか？」

店内には、X姉妹が給仕をしているが、H Yはいつもの様に壁にもたれて昼寝してるし、B Kは暇なので、そのH Yの髪をいじっていた。A Mもそれを見て、

「…ですね」

「だったら、このM Zさんをエスコートして出かけていいぞ！」

と、H Gが気を利かせると、M Zが喜んで、

「よろしいのですか？H G社長（キャー、H G社長たまにはいい事を言っ下さる…雨が降るかしら…）」

「先日の旅行では、ご迷惑をおかけしましたので、今日はA Mと楽しんできて下さい」

「あのく准尉…自分の意見は尊重されませんか？」

と、A MはいつものようにH Gにイジラれていると思っていたが、H Gは真面目に

「ダメ！行ってこい！！」

「あもう、私の事お嫌いですか？」

とM Zは目をウルウルさせて、A Mを見つめる。

「いつ、いや…その…」

A MはH Gに言われてM Zを連れて白山亭を後にした。

Y 国際港商店街を港の方に歩きながら、

「…さて、どこに行きましようか？」

「あの…怒っていらしゃいます？」

「なにがでしょう？」

「私と…その…デートだなんて…HG 社長に言われたからと…」

と、縫る様に言う、MZ に AM は遠慮がちに

「はあ…むしろ光栄と言いますか…MZ さんの様な高嶺の花の様なお方と出かけるのは（正直、この人近寄りがたくて、チョット苦手なだけで…皆の話だと、高慢で高飛車な人らしいけど…自分の前ではなぜか乙女なんだよなあ…）」

「まあ、嬉しいですわ」

と言つて、微笑む MZ に対し、AM はふと、

「TT さんの話では、この所よく来店しているそうですが？」

「はい…？」

「いつも准尉や TT さんに『AM 様は』と訊ねられているそうですね…」

「…（汗）（ギクツ！これでは IY に対する KJ みたいに、ストーカー扱いされてしまいますわ）い、いえ、白山亭のコーヒーが飲みたくて来ていますの…オホホ…」

と、笑いながら、誤魔化していると、AM は思い出したように、

「そうですか…准尉は『店の前に車を止められて、駐停車禁止なのに…外交官ナンバーだから取り締まれないと港町署の署長から苦情が来ている』と言っていましたよ」

「（ドキッ！）いつ、今は HG 社長が駐車場を設けて下さったので、そこに止めていますのよ（汗）」

「ええ…『署長（HG の親戚）がうるさいので、仕方なく駐車場借りた』とも言っていましたね」

と言うと、M Zは（何てこと言いますの！HG社長（怒））とA Mの見えないところで、手を握ってワナワナと震わせる。

「でも、帝都からわざわざ、当店のコーヒーを飲みに来ていただけるなんて、准尉に成り代わりお礼を申します」

と、A Mが改まって言うと、M Zは驚いて、

「そつ、そんな…（アーン、コーヒー目当てだけの女になつてー（泣））」

M ZはA Mともっと距離を縮めたくて、急場であれこれ考え、

「じつ…実は私狙われていますの。それでA M様にボディーガードをお願いしようかと…」と、間の抜けた嘘をつくが、A Mはそれを見透かして

「いいですよ、受けましょう…時給×十万皇園で…（そう言えば、准尉は、M Zさんは漫才相手になると言っていたな）」

と、シレつと言うと、M Zは腹を立て、

「高いですわ！HG社長みたいに、お金に意地汚くないでください」

と言うと、A MはM Zをからかって、ついでに漫才に持ち込もうと

「でも、ボディーガードの依頼なんですよね…では誰に狙われているのです？MPとか？」

「違います！なんであの脳みそ筋肉女なんかに…」

「じゃ、かつて准尉が退治した銀狐とか？」

「違いますわ、ふざけないでください」

「（アレ？）…意外とノリが悪いですね。准尉は漫才相手にすると面白いと言ってたけど…」とA Mが言うと、M Zは紅潮して、

「心外ですわ！」

と言い放った。

「では、誰からですか？」

「…それは、その…」

とM Zが詰まると、A Mは

「やはり、冗談ですか…」

と、M Zの話を嘘とは言わないで、冗談と言った。

「エッ？」

M Zは、A Mに試されていたことに気づき、驚いた。

A Mは、今までM Zの方を向いていた顔を空に向けて、独り言の様に、

「自分の理想の相手は、漫才が出来る人でして…」

と言うと、M Zは驚いた。

「…ま、漫才ですか？（やっぱり、A M様は芸人目指しているのかしら…汗）」

「漫才みたいな軽快な会話のやり取りで楽しく語る事が出来る人が理想なんです」

と言うと、

「ハア…（A国仕込みですね…私はA国人のノリって苦手ですわ）」

と言って、M Zは肩を落とした。

Y港街ショッピングモールのカフェで二人は休憩をしていた。

その隣に一人の女性が座った。その女性を見たA Mは驚いて

「あれ？M Jじゃないか」

と言うと、相手は、A Mの声に驚きA Mを見て、

「ハアイ！A M。こんな所で…お久しぶり」

とM Jは陽気に返事をした。

「どなたですか？」

と、M Zが訊ねると、A Mは

「自分がA国に居た頃の相棒のM J…別名“スーパ―M”」

「A M、そちらの方どなた？ワタシM Jよ、ヨロシク」

と言って、M JはA Mに訊ねながら、握手をするためにM Zに手を出すが、

「私はD国エージェント機関D S Fの大使館勤務要員のM Zと申します」

と、M ZはツンとしてM Jと握手はせずに挨拶をした。M Jは出した手を引っ込めると、残念ながらアクションをして

「A M、こちらは皇国での新しい彼女さん？」

と、A Mに首を捻りながら訝し気に聞いた。A MはM ZがM Jにした態度に

「いや、ボディーガードの依頼人」

とシレつと言うと、

「あら…そう、ワタシてつきり…ごめんなさいねM Zさん」

と、ニヤケて言うM Jに、M Zは（え、ボディーガードの依頼…まだ有効なのー）と驚いた。

「M Jは何でこっち（皇国）に来ているんだい？」

M JはA Mのジョークを知りながら

「ワタシは任務よ…勿論ボディーガードでね」

「同じか（笑）」

「そうね、お互い…アハハ！」

と言って、M JとA Mは笑い合う。そのノリについて行けず、M Zは（これだから、A国人は）といじけた。

「A Mは今何してるの？」

「この街（Y国際港）で民兵会社時代の恩師に弟子入りして仕事している」

「そうなんだ…ワタシ、あんたが国（皇国）のお母さんが亡くなったって言って、急に帰国したから心配したのよ…その後連絡してくれないし…」

「ゴメンな、向こうで物価が上がって暮らしづらくなったのもあってね…」

「そうね…あっちは物価が高くて…でもおかげでこっちでは物価が安くて助かるわー」

と嬉しそうに言うMJにAMは、

「そうだ、来皇中に暇があつたら、遊びに来なよ。Y国際港駅前の『白山亭』って言う喫茶店に行つて自分呼び出してくればいいよ」

「そう、是非伺うわ」

と言ったところで、MJのスマートフォンが鳴る

「…あら、依頼主から着信…会議終わった様ね…じゃワタシは任務に戻るわ。バイイ」
「バイイ」

MJが去ると、すっかり置いてきぼりにされたMZにAMが気づき、

「あれ？MZさんどうかしました？」

「…なんでもありませんわ！（怒）」

●X姉妹の腕前

HGはX姉妹とHYとAMを連れて港町シューティングセンターを訪れていた。

「珍しいですね、いつもは港町警察署の射撃場に行くのに」

とHYが言うと、

「この子ら連れて港町署に行ったら、誘拐犯扱いされかねん…」

と言って、HGはカカと笑った。そう言うHGにAMは

「そんな事言つて、ホントはKTに『隠し子』と言われるのが嫌なんですよ！」

…K Tは、港町警察署の受付にいる女性警察官。H Gを師匠と呼んでいる。作者「巻き込まれ親父の慰安」参照

「ギクッ(汗)」

「A Mにバレてますね…准尉」

と、H Yがニヤケて言う

「俺の子じゃな―い！」

とH Gが思いつき反論する。

受付で手続きをして、シューティングレンジの後ろの席に着いたH Gは持って来たガンケースを開けて、

「二人供、どれにする？」

と覗き込んでいるX姉妹に聞いた。

「ワタシこれ」「じゃ、ボクはこれ」

と言って、ケースの拳銃をそれぞれ指さした。

「A M、片方のチェック頼む」

「はい」

と言って、A MはA Xの選んだ拳銃をケースから取り上げ、スライドを引いてまだ弾丸が装填されていないことを確認してから、A Xに渡す。同じくH YもB Xの選んだ拳銃を確認してから渡した。

H GはX姉妹にシューティングレンジに入る様に言って

「じゃ、まず構えて…」

「は、い」

X姉妹が拳銃を構えると、H YとA Mが姿勢をチェックして構え方を指導する。その間、H Gは弾倉に拳銃弾を装填していた。

「准尉、そろそろいいですか？」

とH Yが言うと、

「こつちもいぞ」

と言って、H Gは両手に弾丸を装填した弾倉をあげる。H YとA Mが弾倉を受け取り、X姉妹に指導をする。

「準備出来ました」

とH YとA Mの声が聞こえると、H Gは黙って手を挙げた。

その合図にX姉妹が拳銃を発砲する。一発撃つ毎に指導を受けて、全弾撃ち尽くすと、撃つた的を引き寄せて、結果を見る。

X姉妹は、初弾からの的に当てる腕前があり、全弾撃ち尽くす頃には、的の中心に当たりだした。

「お前達、いい腕だな…さすが国で練習してただけあるな」

「先生の教え方が良いからです」

と答えた。その言葉にH YとA Mは嬉しくなる。

「じゃ、もう一度…二人供弾倉抜いて」

「はい」

と言って、二人から渡された弾倉に弾丸を装填して渡す。

今度は的の円の中に弾を当てた。H Gはそれを見て満足すると。

「はい、今日はこれまで。白山亭に戻るぞ」

「やだー、もっと撃ちたい!」

と、駄々を捏ねるX姉妹に、H Gは

「ダメだよ、弾だって高いんだから」

と言うと、X姉妹は、相手を変えて、

「「ママー、パパが意地悪する〜」」

と言って、HYを見つめた。

「ハイハイ、悪いパパね…こういう時はね、”ケチ”って言うのよ」

「オイオイ」

●MJとX姉妹

BKは大学のキャンパスでX姉妹と待ち合わせをしていたが、時間になっても二人が現れない。

「どうなさったのかしら…」

と思って、BKはX姉妹が専攻している工学部の建屋に向かった。

その途中で、BKはX姉妹が一人の老人と話をしているのを見た。（なにかあったのかしら…）と、BKは近くの木陰に隠れて見ていると、X姉妹は泣きながら老人に抱き着いて、そして崩れ落ちる様に座ると泣きじゃくっていた。それを見て、（どうしたのかしら）と、更に見ていると、老人は二人をなだめていた。

BKはいたたまれずに、その場を離れて元居た待ち合わせ場所に戻った。

BKは何も知らない体を装い、待ち合わせ場所に来たX姉妹に

「随分、遅いですが、何かありましたか？」

と、たずねると、

「先程国から知らせがあつて、バハが亡くなったと…」

とAXが説明した。

「まあ、それは大変！どうなさるの？」

「国からは、今は危ないので、帰国しない様にと言われました。葬儀は向こうに居る親戚で何とかすると」

「そうですの…（先程の御老人は大使館か何かの人かしら…）」

「うん…でも、今日も白山亭のアルバイトには行くよ」

とB Xが言うと、B Kは不安げに、

「大丈夫ですよ？」

と聞くと、A Xが

「こんな時には、逆に何かしていないと何かに飲み込まれそうで…」

とX姉妹は、お互いの手を握り合った。

「そう…」

白山亭…

この日、客が居ないので、H GはB KとX姉妹相手に母屋から古いアルバムを持ってきて、
「このアルバムは、このお店の歴史を物語っています。レジの後ろにお店の歴史を綴ったパネルが在りますが、パネルの写真はこのアルバムの写真を使っています」

と言って、H Gは古いアルバムを捲ってB KとX姉妹にこの店で撮影した写真を見せた。

「昔は、お着物だったんですね…」

B Kが言うと、H Gは写真を指さして、

「そう、女給は着物にエプロン、フロア担当者は割烹着。ちなみにこの写真の割烹着姿の人が私のひいお婆さん。襟元のレースがお洒落ポイントだそうです」

「御創業者の方ですね」

「そうです」

B Kがアルバムを捲りながら、

「洋装でエプロンや割烹着の方がいますね」

「創業当時の、着物文化から洋服文化に移行している過渡期で、洋服の方は大抵外国人です」

「まあ…外国の方も働いていたのですね」

と、B Kが言うと、X姉妹がB Kの両脇から覗き込む。

「はい、この頃は大陸の西の方で内戦や国家間の戦争とか多発していたので、皇国に逃げて来た難民の方がこのY国際港に多く上陸しました。その人達が白山亭で働いて居たそうです（H GはB K達の手前、娼館の娼婦の話を伏せています。作者）」

と、言ってH Gはある写真を見せた。

「H G社長、このお二人の外国人の方は？今私が着ている女給のユニフォームを着用なさっていますか？」

「この方達は、奥に居る方がウチのエージェントのM Pのお婆さんで、手前の方がそのお姉さんだそうです…M Pが教えてくれました」

「えっ？すると、M Pさんって？」

「はい、稀有な事に今はD国に併合された小国からの難民としてこの国に来たお婆さんの姉妹が、かつてここで働いていた事を知らずに、ここに来て私の弟子になりエージェントとして働いて居ます」

と、H GがB Kに対して説明する後ろでX姉妹は別の写真に釘付けになった。

その時、白山亭のドアが開いた。

「いらっしやいませ」

とA Xが応対に出た。

「こんにちは、ワタシM Jと言うんだけど、ここにA Mって人居るかな？」

「AMさん？えーと、今は裏の工場に居ると思いますけど…」

と言って、HGの方に向いて

「オーナー、AMさんを訪ねて来たと言う方が…」

と言うと、HGは、いつものMZではない外国人を見て、

「こちらに案内して」

と言った。

AXがMJをバーカウンターに案内すると、

「こんにちは、当店のオーナーHGです。ウチのAMをお訪ねで？」

「はい、ワタシはMJと言いましてA国でスイーパーをしています。先日近所のカフェでA国時代の相棒のAMと偶然再開して、ここで働いて居ると言うので訪ねてきました」

「…ああ、そう言う事ですか…今呼びますよ」

と言って、HGは内線電話をかけてAMを呼び出した。

「淮尉、お呼びですか？」

と言って、バーカウンター横の従業員出入り口からAMが入って来た。

「お客さんだ、昔の漫才の相手だったそうだ…はるばるA国から追ってきたそうだが、お前借金でも踏み倒したか？」

とHGが言うと、AMは盛大にコケて、

「違います！」

「じゃ、向こうでも孕ましたか？」

と、畳みかけると、MJが赤面して、二人して

「「違います！！」」

「ハッハッハ…冗談冗談…こいつでよろしいですか？」

「はい…」

MJは赤面したまま答えた。

「でも、私は彼の借金の肩代わりは致しません。悪しからず」

とHGはトドメをさす。

AMはバーカウンターの席から、テーブル席にMJと移動した。

「ユニークなマスターね」

「ああいう人なんで…ハハ(汗)」

「よく、あのような人に雇われているわね…借金でもあるの？それとも何か弱みでも？」

「違う！おまえも、准尉に影響されない！」

「准尉ッて？」

「あそこにいるオーナー…自分の民兵会社時代の教官…『准尉』って言う渾名…えげつない人でね」

「『えげつない』っナニ？」

「えげつないって…『あくどい』とか『いやらしい』…って意味」

「そうなんだ…それでも、ここに居るのは？」

「そりゃ、普段はああ言う人でも、いざとなると尊敬できる人だからだよ。それより、何か飲む？」

「あら、驕り？」

「…いいけど、このコーヒーは飲んだら虜になるよ」

「何か危ない薬でも使ってるの？」

「あのねー、意外と准尉に感化されやすいなMJ」

「アハハ！…じゃそのコーヒー頂戴」

「X！」

「「ハイー！」」

と言って、X姉妹両方がテーブルに来た

「白山亭オリジナルコーヒー、二つ」

「「畏まりました」」

「あら、ハモって可愛いわね」

「X姉妹って言って、双子なんだ」

「「よろしくね」」

「ワタシはMJ、A国から来たの。あなた達は？」

X姉妹の銀髪碧眼を見てMJは聞いた。

「「I国です」」

「あら…I国って、今周辺諸国とのゴタゴタで大変なんですよ？」

とMJが心配して言った。

「はい」

「頑張ってるね」

「「ありがとうございます」」

白山亭でのアルバイトを終え、Y市にあるアパートに帰宅後、X姉妹は

「…やはり、あのお店だったのね…私達のひいおばあちゃんが居た喫茶店と言うのは」

「そうみたいね」

テレビでI国のWT上院議員が来皇しているニュースが流れていた。二人はそれを見て、

「WTの奴、来皇しているんだ…」

「パパを殺したの、あいつだと大叔父様が言ってたわね」

「そうだね、悔しいよ」

「あなたの怒りの感情…ワタシもわかるわ」

「敵を討とうよ」

「どうやって？」

「男屋のガンスミスの工場にガンラックがあって、拳銃やライフル等の銃が沢山置いてある」

「弾は？」

「…入ってない…金庫に入っている」

と、B Xが残念そうに言うと、A Xは暫く考えて、

「あのね、白山亭のバーカウンターの引き出しに拳銃が入っているの」

「うん、知ってる」

「あの拳銃には弾が入っていたわ」

「見たの？」

「うん、開店前にT Tさんが弾倉を抜いて点検しているのを…弾倉には弾丸が入っていたわ」

「それを貰おう」

「そうね」

「じゃ、盗み出す手順は…」

「H G社長とKちゃんに悪いけど…ワタシ達のパパの敵討ちだものね」

「そうだね」

●拳銃盗難

M Jの来店の日後…

H Gは母屋から男屋のガンスミスの工場に入って、

「今日はどの娘を愛でようかなー」

「おい、H G！いい歳こいて、銃器に対してそう呼ぶの辞めるよ。本当の娘共（H Gの弟子のエージェント達）にドン引きされるぞ！」

「うるへー」

と、S Kに言って、H Gは自分とS Kのコレクションが収めてあるガンラックを見ると、

「あれ？」

「どうしたH G？」

「拳銃が二丁無くなってる…」

「なにー？」

S Kが杖をついてH Gが見ているガンラックまで来ると

「ほら…ここ、S 国の拳銃二丁…」

「ホントだ…」

と言って、驚いた。

「H G、カメラ…」

「おう」

H Gが男屋に設置しているビデオカメラの記録を見ると、夜間には誰も工場に入ってきた人影は無かった…

「夜間…じゃないな…もつと前か」

と言って、ビデオの録画時間を戻すが、ビデオの録画時間が二十四時間で書ききされるタイプなので、それ以上は見る事ができなかった…

「どうしよう…」

「警察に連絡するしかないな…」

と、H GにS Kが言っていると、白山亭からT Tに内線電話で呼び出された。

白山亭店内：

「あ、准尉」

「なんだね？」

「あの一、ここに置いてある私の拳銃の弾倉内の弾が減っていますが、准尉使いましたか？」

「なんで俺が？」

「いえ、ここに私の拳銃があるのを知っているのは、私と准尉と娘達だけですから…」

「H Yは？」

「わたしは知りませんよ。准尉」

と言って、H Gの後ろからH Yが顔をのぞかせる。H Gは（一体誰が…拳銃二丁と、T Tの拳銃の弾…そう言えば、あの拳銃…）と考えて、突然

「T T！」

「はい」

「今日と昨日の女給のシフトは？」

と訊ねると、T Tは

「はい、これに…」

と1枚の票を見せた。それを見たH Gは、

「X姉妹は？」

「あら…今日はまだですね」

「シフト表では、もう来ている事になってるぞ！」

「すみません！連絡してみます」

とT Tがスマートフォンを取り出してX姉妹に電話をかけているのを見て、

「あ、Kお嬢様…ちょっと」

と言つて、H Gは店内にいるB Kを読んだ

「はい、オーナーお呼びですか？」

「お友達のX姉妹が今日は来ていない様ですが、何か聞いてますか？」

「いえ…別に」

「そうですか」

「あつ、でも」

「何か？」

「はい、実は…」

と言つて、B Kは先日大学構内で見たX姉妹と老人の話をした。それを聞いたH Gは（拳銃と弾丸が盗まれた事といい…何かあったな）と嫌な予感がした。その時、T Tが、

「准尉、二人と連絡が取れません！」

「何だと！」

●この未熟者めが！

帝都の官公庁街の通り道…総務省と外務省に続く狭い路地をW T上院議員とM Jが歩いていると、いきなり遙か前方に高校生か大学生くらいの若者が現れ、道の真ん中に立ったのを見た。M Jが後ろにも人の気配を感じたので、振り返ると、同じく遙か後方に同じ歳位の若者が立っていた。M Jは咄嗟に拳銃を抜いて構えた。

前後に立つ二人も拳銃を構え、

「「。バ。バの敵ー！」」

と言つて、X姉妹が道の両方からW T上院議員に拳銃を向けた。それを見たM Jは（同時に二人に撃たれたら…間に合わない！）と考え、（上院議員は防弾ベストを着てるから…）と

W T上院議員を庇う様にA Xに背を向け、M JはB Xに拳銃を向けた。その時、

「M J！」

と言う声が聞こえ、M Jが拳銃の引き金を引くのを一瞬躊躇うと、M JはW T上院議員ごと何者かに押し倒された。その時、X姉妹は双子のタイミングで同時に拳銃を撃ち、狭い路地に拳銃の発射音が響いた…

A Mの撃った弾はA Xの肩に当たるが、A Mの拳銃に入っている弾丸は強化ゴム弾であったので、撃たれた衝撃でA Xは倒れたが、立ち上がると逃げて行った。B Xも同じく反対側へ逃げて行った。

A Mの足には、銃弾が当たり出血していた。

A Mが撃たれて入院したことを知り、H GとH Yが病院に行く。病室にはベッドに横たわり、傍らにはM Jが居た。

「この未熟者めが！」

とH Gが言うと、

「准尉…そんな、可哀そうよ」

H YがH Gに取り成す様に言うと、

「いや、ただ言ってみたかっただけ…」

とH Gが言うと、一同コケル。ベッドに居たA Mも何らかのリアクションを取ろうとしたが、足が固定されているので動けなかった。

「無茶言わんでください！准尉」

「A M…無理せんでいいぞ」

「だったら、言わんでください！」

「で…お前、誰に撃たれた？」

「…それが…」

と口ごもるAMに、

「？」

「HGさん、ゴメンナサイ！」

と突然MJが頭を下げた。

「いや、MJさん頭を上げてください。AMは自らの意思で貴女とWT上院議員を庇って撃たれたと聞いていますので…」

とHGが言うと、AMが

「いや…准尉…その…」

「なんだAM、齒切れが悪い言い方は」

「…はい、実は自分の足の銃創は…」

「ワタシの拳銃が暴発したからです」

と、MJが頭を下げて言った。それを聞いたHGとHYは

「何だっつー」

「ワタシがAMに押し倒された反動でトリガーに指が掛かったままの拳銃が手から離れて、グリップが地面に着いた拍子に指がトリガーを押す格好になって…激発しました。」

「このー、未熟者めが！」

「なんで、自分がくしかも、二度も…」

AMは自分のせいではないのに、HGにそう言われて心外に思った。

「お前の押し倒し方の問題じゃないか」

「…ぐもつとも」

「どうせ、押し倒すのならなー」

「ダー、それ以上はセクハラになるから、言わんでください。准尉」

とA Mが顔を赤くして言うと、M JもH Gが言おうとしていたことを想像して顔を赤くした。

「そもそも、なんで現場に居た？」

「はい、O T殿下の事で総務省に行っていて、そこでM Jを見かけたので、声をかけようとしたらB Xが拳銃を隠し持つて歩いているのを見かけたので、追いかけてました」

「…次の帝都行啓の打ち合わせか」

…皇王家の事は皇王省と言う役所があります。皇王省も独自の警察機構を持っています
が、地方行幸・行啓等の各県警やシークレットサービスを必要とする事は総務省の管轄なので、その打ち合わせにA Mも入ります。作者

「はい」

「…それは、ともかく…W T上院議員を狙った奴らは？」

「はい、X姉妹の二人です」

「何だと！」

「間違いありません。ハッキリ見ました。そして発砲前に『パパの敵！』と言っていました」

「ナニ？確かにそう言ったのか！」

「はい、ワタシもハッキリ聞きました」

「…いったい、どういう事なんだ？」

「X姉妹二人が撃った弾は？」

「誰にも当たってません…多分ロクに射撃訓練していなかったのでは？」

「えー、あの拳銃、俺のコレクションだから調整はバッチリんだけど…それに、この前あの娘達が使って、俺達が拳銃の撃ち方を指導しただろ？」

と、H Gが残念そうに言うと、A Mが不審そうに

「何ですか、それ？」

と訊ねた。H Gは渋い顔をして、

「俺のコレクションの拳銃が二丁盗まれた。盗んだのは多分X姉妹」

「「えー」」

その場に居る、くき以外の三人が驚いた。

「ところで、警察の事情聴取は？」

とH GはA Mに訊ねた。

「それがですね…」

とA Mが言いかけると、M Jが

「W T上院議員が、“外交官特権”と言って、警察を追い返しました」

「えっ？」

「W T上院議員も犯人のX姉妹を知っているようで、何か言いづらい背景がある様でした」

「…で、W T上院議員は？」

「はい、ここからI国大使館に電話して、I国大使館に行っただけ…」

「？」

帝都街角の路地裏…

A Mに右肩を撃たれたA X…その痛みがB Xにも共有され、痛くないところが痛み出し、A Xが撃たれた箇所には痣ができていた。

「Aは、撃たれた所は？」

「うん…痛いだけ…血は出ていないみたい…」

「見せて」

と言つて、B XはA Xの右肩をはだけさせると

「痣になっているだけだね…体に銃弾が入っていない…どうしてだろう？」

「わかんないわ…あなたは？ワタシと同じく右肩が痛そうだけど」

と言つて、今度はA XがB Xの右肩を見た。

「…赤くなっているだけね」

「…これか…H G社長が言ったことは…」

「なに？」

「いや、以前H G社長がボクとAの双子の異次元での意思疎通についてボクが話したら、『今の内から、離れることをお勧めするよ。恋愛をしたり、お酒を飲んだりしたらもっと大変な事になるよ…そろそろ、身も心もそれぞれ別の人格だと思わないと、この先生きていけない』って」

「そんな事、H G社長と話したの？B」

「うん…あの時は、こうなるとは思っていなかったんだ。H G社長がなんとなくパパの様に思えて、何でも気軽に話せちゃうんだ」

「そうよね…H G社長つて、パパみたいね…ワタシ達勝手にパパと呼んでいるけど…だからかな、白山亭で働くのが楽しかったね」

「これから、どうしよう…」

「アパートに帰れないわね…白山亭も大学も…どこかに隠れないと」

「だったら、母屋に隠れようか…三階には誰も居ないし…」

「良い考えね。そうしましょ」

X姉妹は、Y国際港駅に下車して、白山亭横の運河の入り口の木戸ら忍び込み、母屋に潜り込んだ。

● H G 動く

W T 上院議員が大使館から一向に戻ってくる気配が無いので、H G は不審に思いつつ、I S に電話した

『はい、どうも I S です。そちらからかけて来るとは珍しいですね。H G 社長』

「まあね」

『そう言えば、この前、社員旅行で F 県領地に行かれたとか… M Z 嬢が教えてくれましたが、山中のしなびた温泉宿…いいですね、私もご相伴に預かりたいところで…それで T K 様は B 侯爵に嘘をついてまで H G 社長と温泉に行かれたのがバレて、今 B 侯爵亭で謹慎中だとか…』

「あつ、そうなんだ（やはり、バレたか）」

『あれ？ご存じない？』

「…最近、ウチにコーヒー飲みに来ないので、不思議に思っていたが」

『…で、ご用件は？』

「スリーパー M と名乗るボディガードが警護している人物について知りたい」

『スリーパー M …ああ、A 国のフリーのスリーパーの M J の事ですね。こちらに来皇していますな。それが何か？』

「ウチの A M と関係しているらしい」

と H G がとぼけて言うと、I S はそうとは知らずに、

『ほお？』

「ウチの大事な跡取りに何かあったら困るのでね」

『さいですか… A M 君は H G 社長の跡取りですか…』

「私も、もう歳だし、早くに跡継ぎに譲って隠居したくてね」

『またまた、そんな事言つて。もし隠居したら、我が皇国国家公安局に引き抜きますよ』

「それは、勘弁！」

『おや、そうですか…で、スーパームの依頼主の事ですね』

「そうだ」

『I国の上院議員WT氏の警護で来皇していますな…目的は、難民支援の予算増額と復旧支援についてですな』

「I国って、今周辺諸国と紛争を起こしている？スーパームがA国の人だから、てっきりA国の要人だと思ったが…」

『はい、そうです。WT上院議員は、A国の大統領補佐官閣下と会談の後に我が国に来てますね…（端末を叩く音）その行程で暗殺者に襲われてますなあ…もつとも返り討ちにしたようですが…殺ったのは、件のスーパームですね。ボディガードとしてA国でスーパームを雇ったのでしょうか』

「成程、I国の上院議員がなんでA国のフリーのスーパーなんぞをボディガードに雇ったのが理解できたよ…ちなみに暗殺者が誰か判るかね？」

『（また端末を叩く音）I国の政治結社の一員ですな…名は“YX”…元農園の経営者だそうですね…WT上院議員の経営する農園に最近買収されたそうで…それも違法な取引が発覚して…WT上院議員は本国に召喚されるそうです。ま、逮捕起訴確定ですな』

「暗殺者に家族とかは？」

『…ああ、いますな…双子の子供が…AとBと言う名の女の子』

「よくそこまで調べ上げたな」

『そうですか、お役に立ちましたかな？』

「ああ…有効な情報ありがとう」

『いえいえ…では、お代は白山亭オリジナルコーヒーと白山亭海軍サンドウィッチで…』

「わかった」

H GはI Sとの通話を切ると

「X姉妹…あの子達の父親が暗殺者とはな…」

「准尉、どうします？」

H Yが心配そうに訊ねる。

「父親の敵討ちか…助けてやりたいな」

「そうですね。可愛らしいし…」

「A M」

「はい」

「お前が撃たれた場所を教えてください」

と言って、H Gは地図アプリを表示したスマートフォンを渡すと、A Mはそれを操作して、

「はい、帝都の官公庁街の、総務省と外務省に続く狭い路地…ここです」と、地図を示した。

「この時の人の位置は？」

「はい、ここに自分とM JとW T上院議員…ここにA X、それから反対のここにB Xが居ました」

「そうか、分かった！いくぞ、H Y」

「はい」

帝都の官公庁街の総務省と外務省に続く狭い路地…

H GとH Yは、A Mの示した場所に居た。

「…ここか」

警察が現場検証したチョークの跡が真新しく、またA Mの出血の跡も残っていた。

「H Y」

「はい」

「A Xの居たと思われる場所に行ってくれ」

「はい」

H Yが指定された場所に行く。

「うーん、射撃場のシューティングレンジ位か…じゃ、この前の腕前なら外すことはないな…、はて？」

と顎に手を当てながら、周囲を見渡すと、

「あそこに監視カメラがあるが、あの位置だとB Xの姿が映っても、顔まで分らん…なかなかいい位置で犯行を行ったな」

「准尉、変な所褒めないください」

と戻ってきたH Yに突っ込まれた。

「ああ、悪かった…今度は、B Xが居たと思われる場所に行ってくれ」

「はい」

H Yが指定された場所に行く。

「これも、射撃場のシューティングレンジ位か…それなら、どちらかの弾が当たってもよさそうだが…」

とH Gが訝しがっていると、

「准尉！」

「何だ？」

「これ…」

とH Yが指差している所に行くと、

「これって…」

「ですよ…」

そこには、ペイント弾の弾頭が転がっていた。HGはそこにポケットからわざと小銭を落とすと、それを拾うと共にペイント弾の弾頭を回収した。それを見たHYは、周囲を注意深く見回して、そこに転がっているもう一つのペイント弾の弾頭を見つけ、何気ないそぶりで近づくと、靴紐を直すふりをして、素早く回収した。HGはそれを見て（何も指示をしなくても、キチンと心得てやってくれる…ありがとう）とHYに感謝した。そして、足早にその場を立ち去ると、喫茶店に入り、お互い回収したペイント弾の弾頭を見せ合い

「准尉…これって、お店でTTの拳銃に使っている」

「…お前もそう、思うか？」

「はい」

「帰って、弾丸のライフリング痕（施条痕）を調べよう」

「そうですね」

白山亭の男屋に戻り、拡大鏡を使ってペイント弾の弾頭についているライフリング痕を確認する。それと、男屋に保管している各ライフリング痕の写真から紛失した拳銃のライフリング痕を比較して、

…「特別銃器携帯・使用許可証」を所持している者は、所有している銃器のライフリング痕の写真を保管する義務が生じる。所有・保管している銃器が紛失・盗難した場合は、そのコピーを所轄警察署に銃器盗難・遺失物届と共に提出します。作者

「ダ、俺のコレクションだ！」

「はあ…」

とHGとHYは、がっくりと項垂れた。

「さて…と、どうするかね？」

「あの二人を探さないと、ですね」

「そうだな」

●子鼠

男屋から母屋に戻り、自分の部屋で着替えて、H Gの部屋にお茶を持って来たH Yが深刻そうに

「准尉…なんか天井裏でガサゴソいう音が…」

「鼠かね？それとも母屋の霊達が騒いでいるのかな？」

「やめて」

と言って、H Yは耳を抑えてしやがみ込んだ。それを見たH Gは困り顔で（I Yは任務で居ないし…あつ居たもう一人！）と思い出し、自室の客間側の襖を開けた。

「どうしたの？H G」

と驚くK Mに

「K M…実は、H Yが…」

「えっ？ナニ？」

「は…はい、部屋に居ると天井裏からガサゴソいう音が…聞こえて」

「鼠じゃない？」

と言いながら、K Mは階段を登り二階に行くと周りを見回して、

「ここの人達（母屋の霊達）は至って呑気…いや…なんか言ってる」

「ヒィ！」

とH Yは小さい悲鳴を上げる。I Yの他に“見える人”のK Mが母屋の霊達がしきりに上を指しているのを観た。

「上に誰か居るよ…三階の布団部屋、人だね」

とKMが言うと、HGは直ぐに

「HY」

「はい」

「拳銃を持ってついてこい！」

「はい」

HGは母屋の三階にHYと上がると、拳銃を構えて布団部屋を開けて電気を点けた。

そこには、布団を被っているX姉妹が居た。HGは

「双子の子鼠、みいーつけた！」

「ヒイ…！」

拳銃を構えたHGがX姉妹を見つけてニタリと笑う。HGに拳銃を向けられ、双子は恐怖に戦慄して抱き合った。HGはその周囲を見て、

「ン？お前さん達拳銃はどうした？」

「はい…運河に捨てました！」

と、怯えながら言うと、それを聞いたHGは頭に血がのぼり、

「ぬわにいく、あれ俺の貴重なコレクション！だったら今すぐ運河に飛び込んで取ってこい！」

と拳銃を突き付けたHGの剣幕に、双子は恐怖に顔が引き攣り（げ、逆鱗に触れた！）と思
い、

「うつ、嘘です。その戸棚に…」

と震える指で示すと、

「確かめるか…おいHY」

「はい」

「こいつら逃がすなよ…聞きたい事が山程ある」

「ハイ」

H Yはニツコリ笑って、X姉妹に向き直ると、二人に拳銃を向けず

「大丈夫よ…ああ見えても、准尉はあなた達の味方だから…でも、准尉のコレクションに手を付けたのは不味かったわね」

「は…は…」

「H Y、余計な事を言うな！面白くなくなる…」

「はあーい」

と笑って返事をするH Yに、X姉妹は、『面白くなくなる…』って、ナニ？と益々不安になった。

「でも…よくワタシ達が居るって判りましたね」

とA Xが言うと、H Gは

「ウチの警備システムは優秀なんだ」

と、母屋の霊達の事をそう言ってシレっと答えた。

● X姉妹と白山亭の歴史

H GはX姉妹を食堂に連れて行くと、H Yに食事を出す様に命じて

「…まずは、なにか食べなさい。あれから何も食べてないんだろ？」

「はっ、はい」

「さあ、簡単な物しかないけど、たんとおあがり」

と言って、H Yが食事を出すと、

「いただきます」

と言って、涙を流しながら食べ始めた。

「…でも、なんで母屋に隠れてんだ？」

「はい…実は」

「？」

「ワタシ達のひいおばあちゃんが昔この店で働いていたと聞いたもので…」

「なんだと」

「ひいおばあちゃん…昔、D帝国（後のD国…I国はE連邦との戦いで負けたD帝国の領土が分割された一つ）時代のI領地（後のI国）の領主による反乱で、内戦となり、討伐に来たD帝国兵士に両親を殺され、身重のひいひいおばあちゃんがこの国にたった独りで逃れてきて、Y国際港の道で物乞いをしているのを、『女将さん』って方に助けられて、その時生まれた子供がワタシ達のひいおばあちゃんだそうです…ひいひいおばあちゃんは、その後『女将さん』が始めた白山亭の厨房で働いていたけど、流行り病で死んでしまいました。『女将さん』は残されたひいおばあちゃん事を不憫に思って、当時の『Mお嬢さん』と言う人と一緒に学校に通わせて、この店で女給として働かせて、お金を貯めさせて、ある程度独り立ちが出来る様になり、I国の戦乱が収まったので、『女将さん』が父親の居るI国に帰る手配をしてくれました」

「それだと、その『女将さん』と言うのは、俺のひい婆さんのINの事で『Mお嬢さん』と言うのは、俺の婆さんと言う事になるな」

「そうだと思います…ひいおばあちゃんは『女将さん』から話があった父親が居ると言うI国に渡って父親を捜したそうです…でも結局見つからず、結婚しておばあちゃんが生まれました」

と言って、AXは古い皇国のお守りをHGに渡した。HGは

「中身を見ていいか？」

と訊ねると、X姉妹は黙って頷いた。HGはお守りを開けると中から紙の包みと何やらメモが見つかった。そこには、今X姉妹が言った事以上の話が書かれていて、最後にINの名が書かれていた。

「へえー、お前さん達、この店に縁があるんだ…」

「はい、前に見せてくれたアルバムにワタシ達のひいおばあちゃんの若い頃の写真がありました」

と言うと、HGは

「ちょっと待ってろ！」

と言って、HGは自室から古いアルバムを持って来た。

「どこだ？」

と、言っただ子にアルバムを渡すと、迷いなくアルバムのあるページを開いて、指さして「これです」

HGが見ると、おそらく、白山亭創業当時の店の前に居る着物姿に割烹着を来た曾祖母I Nと同じく洋服に割烹着でフライパンを持った外国人らしき女性の写真。それとも一枚、中学校の制服を着た祖母HM（当時IM）の隣で女給服を着た外国人の女性が共に笑っている写真が貼られていた。

「これが、若い頃のひいおばあちゃんの写真です」

と言って、BXが古い写真を取り出すと、田舎町で農作業を着た女性がカラーで写っている。HGは両方の写真を見比べると

「確かに同一人物…」

と言うと、HYも両方の写真を見て

「…そうですね准尉」

このアルバムは年代順に整理されているのに、なんでこのページの写真だけわざと年代が明らかに違う写真があるのか疑問に思った事があったが、HGの曾祖母と祖母がそれぞれ外国人と一緒に写っている写真を並べているだけだと考えた：それが、解消された：X姉妹の高祖母と曾祖母の写真を並べている事に：

●事件検証

「お前さん達は、なんでWT上院議員を狙ったんだ？」

「はい、それはワタシ達のパパの農場が乗っ取られたからです」

「乗っ取られた？」

「はい、パパはおじいちゃんとおばあちゃんが苦勞して大きくした農場を不利な買収で買い取られたそうです」

『『そうです』って、なんだ？』

HGはAXの言葉に何か引っかかりを感じ、聞き返すも、AXは

「周辺諸国と紛争のゴタゴタで、隣国の爆撃でママが亡くなり、パパがワタシ達の安全を考えて皇国に留学させ、十分な仕送りを確保するために奔走している内に、WT上院議員の家族が経営する農園に買収されたとパパから聞きました」

と言うと、BXが続けて

「パパは、この買収は違法だとして、パパの支持する政治結社の方に協力していただき国に提訴している事を聞きました。裁判のためにA国の政治結社の協力を得るためにA国に渡っている時に殺されてしまいました」

それを聞いた、HGはISから聞いた話と違う事に

「殺された？WT上院議員を暗殺しようとして返り討ちにあったと聞いているが」

と、訊ねると、X姉妹揃って、

「それは、嘘です」

「？」

「パパは、あの日確かに拳銃を持っていましたが、W T上院議員に呼び出され、話し合いの最中にボディーガードが席を外した隙に…W T上院議員に拳銃で撃たれたようです」

とA Xが話すと、またH Gが

「…『ようです』なんだ？」

と尋ねるが、A Xは続けて、

「はい、パパとW T上院議員しか部屋に居なかったので…撃ったW T上院議員は『拳銃を抜いて撃とうとしたので、拳銃を奪って撃った』と、言っているそうです」

「拳銃はお父さんの物だったか？」

とH Gが訊ねると、今度はB Xが

「それが…二人供同じ拳銃を持っていたと聞いています…パパが撃たれた後取り換えられたのかも…」

「拳銃のシリアルナンバーを調べれば判るのではないのか？」

「それが…W T上院議員は外交官特権を使って警察に教えなかったそうです」

「お父さんののは？」

「I 国から持ち込んだもので、シリアル番号の記録が不明だったそうです」

とA Xが言うと、H Gは話を切るように、

「…さつきから、誰かに教えて貰った事を話しているが、一体誰が？」

「はい、パパの支持する政治結社の方が来皇して教えてくれました」

「その人は信用できる人かね？」

「はい、パパの叔父に当たる方です」

「だったら、最初からそう言って欲しいね」

と、H Gが呆れて言うと、

「「めんなさい」」

と謝った。

「君達の父親の事については、M Jさんに訊ねてみるか」

と、H Gは腕を組み、考えると、

「じゃ、次にお前さん達は、どうやって俺のコレクションの拳銃を盗んだ？」

と、H Gが尋ねると、B Xが、

「はい、ボクが、H G社長が男屋のガンスミスで作業しているのを見て、鍵の場所を覚えまして」

「ガンラックの鍵は、俺とS Kが管理しているはずだが…一体どうやって」

「はい、それはボクが男屋に居て、S Kさんを見張り、Aが店内を見張っていて、S Kさんが席を外した隙に…」

「双子の以心伝心？」

「「はい」」

「俺とS Kのコレクションのガンラックの拳銃を持ち出したのは？」

「はい…お客さんのだと、ご迷惑が掛かかると思ってた…」

「そこは、気を使ってくれたんだ」

「「はい」」

「じゃ、弾は？ガンラックの拳銃にはどれも、弾が入っていないぞ！」

「はい、それはワタシがバーカウンターの鍵付きの引き出しに入っている拳銃の弾を抜きました」

とA Xが答えた。

「ナニ、やはりT Tの拳銃からか…いや、T Tが『弾倉内の弾が減っていますが、使いまし

「たか?』と聞いて来てね」

「はい」

「その鍵は?」

「TTさんは、朝店内に来るとまず引き出しの鍵を開け、帰るときに鍵をかけるので、それを覚えていて、TTさんが居なくなった隙に…」

「…それですか!」

「[c.c.]」

「TTの拳銃には、店内での盗難とか無銭飲食があった場合に犯人に追跡用マーキングをするためのペイント弾…しかも火薬の量をかなり減らした…弾を入れているんだ」

「…だとすると、当たっても、色が付くだけですか? 准尉」

とHYが訊ねた。

「そうなる。しかも、TTの拳銃用にこさえているので、他の拳銃で撃つとだな…」

と言って、HGは回収した拳銃を持ち、スライドを引くと、空の薬莢が排出された。もう一丁の拳銃も同様に、スライドを引くと空薬莢が排出された。それを見て驚くHYとX姉妹…

「…この様に、チャンバー内で激発の力不足でスライドが下がり切らず、チャンバー内に残るか、排莢不良となるんだ。TTの拳銃だと連射が出来るギリギリの火薬量だ」

と、HGはHYに答えると、X姉妹に

「お前さん達、WT上院議員とはどの位離れた距離から撃った?」

とHGが訊ねると、X姉妹は互いに顔を見合わせて、

「ワタシは、その廊下から玄関の外くらい…?」

「ボクは、もっと先かなあ…」

と言うと、HGとHYは(…やはり)と、現場で検証した事とX姉妹の証言が一致した。

「それじゃ、当たらんどころか、手前で落ちるな…有効射程距離はTTがバーカウンターか

ら入り口の扉までの距離しか当たらない様に火薬の量を調整している」

「そうなんですか？ 准尉」

「ああ…だから、撃つても被弾した人が居なかったんだ…A M以外に。だから、現場で拾ったペイント弾が破裂せずに残っていたんだ」

とH Gが言うと、H Yは納得して頷いた。

「「えっ？ A Mさん撃たれたんですか？」」

と驚く二人にH Gは

「そうだ、もともと拳銃の暴発だったが」

「「それで、具合は？」」

「足の脛を少し挟った程度」

「「ゴメンナサイー(泣)」」

「あゝあ、泣かせちゃったー。いーけないんだ！」

「うるへー、H Y」

「ま、お前さん達の拳銃不法所持と、俺の管理不届き…コレクションの拳銃が無事返ってきたから、俺は盗難届を出さないし、M Jは暴発事故でA Mに怪我させたから、A MがM Jを告訴しない様に抑えて、M Jに襲撃犯についてお前さん達と証言させないようにして…W T上院議員は、違法取引で本国に送還されるから…これでチャラに出来るな」

「でも、准尉。警察には？ 現場検証もしていますし、監視カメラもありましたよね」

「それこそ、A Mに対するM Jの銃の暴発事故にする。こいつらは、道に立ちはだかったのみで、それに反応してM Jが拳銃を構えただけ…後は、A Mの押し倒し方が悪くてM Jが拳銃を暴発させた」

「えげつなー！ でも、それはいい考えですね」

とH Yが嬉しそうに言うと、X 姉妹は

「「えっ？ W T上院議員は捕まったんですか？」」

と言って、驚いた。

「ああ…君達の農場の買収について不正な取引疑惑があったそうで、君達が襲撃した後直ぐにI 国大使館に呼び出され、そのまま本国に召喚される…帰国後、逮捕起訴されるそうだ。農園は返されるんじゃないか？」

「「よかったー」」

と言って、X 姉妹は抱き合った。

●事件解決

翌日、H Gはまだ国内に居るM Jを白山亭に呼び出した。X 姉妹に厨房に隠れるように言
って、H GはM Jと話をした

「あのH Gオーナー、話があるとか…」

「はい、少し教えて欲しい事がありましたね」

「はい」

「A 国での事ですが、あなたはW T上院議員に雇われましたよね」

「はい」

「雇われた時の理由について教えていただけますか？」

「はい、W T上院議員はA 国のI 国大使館からの紹介ではなく、協会からの紹介で依頼がありました」

「…協会？」

「はい、個人のボディーガードとかスニーパー等が登録している仕事斡旋の協会です。A M
とはそこで知り合いましたから、詳しくは彼からどうぞ」

「I国大使館経由ではないのがおかしいね」

「はい…ワタシも外国大使のボディーガード依頼は幾つか受けたことがあります。バカンスとか個人的なパーティーのボディーガード依頼はご本人自ら依頼された事がありますが、公務で大使館経由じゃない個人的な依頼と言うのは初めてです」

「君はその依頼を受けて、A国でWT上院議員がI国の人と会う場所に居ましたか？」

「…はい、確かに居ました」

「成程…理由は…守秘義務と思うけど、WT上院議員は本国に召還されたそうだから、差し支えなければ教えて貰えないかな」

「はい…ワタシもWT上院議員から依頼料頂いていないので、正直に話しますよ。雇われた晩にWT上院議員から『今夜私を訪ねて来客があるので、警護を依頼したい』と言われました。その通りにその晩来客があり、ホテルの部屋で私を背後に立たせてWT上院議員は客の方と話をしていました。内容はD国語なので何を言っているのか…その内二人供興奮していて、WT上院議員がお酒を所望したので、ルームサービスを呼ぶのにワタシが部屋を出たら、銃声がして…慌ててワタシが部屋に飛び込むと、WT上院議員が拳銃で客の方を撃っていました」

「えっ？」

「やがて、ホテルの通報で警察が呼ばれましたが、WT上院議員は外交官特権を盾に警察官を追い返し、大使館にはワタシが撃った事にされてしまいました。その時は、ワタシはWT上院議員と客の二人つきりにした落ち度を、WT上院議員が庇ってくれたくらいにしか思っていないませんでした」

「…」

「その後、WT上院議員の依頼で皇国について来て、あの様な事に…」

「ありがとうございます」

「二人供、でておいで！」

とH Gが言うと、X姉妹が厨房から出てきた。

「あつ！あんた達」

「これが真相だそうだ…分かったか二人供」

「はい」

「なんでこの子達がここに？H Gオーナー」

「WT上院議員を襲撃した後、ウチに隠れていたらしい…困った子鼠達だ…」

「拳銃は？まだ所持しているのですか？」

と言って、MJはジャケット裏の拳銃に手をかけた…MJとしては、自分が父親の敵と思われると考えていた。H GはMJを落ち着かせようとして、手で制すると、

「今、あの子達は丸腰だよ…二人の拳銃は私の所から持ち出された。今は回収してある」

「なんで？この子達拳銃を使えるの？この子達が撃った弾は、何処に当たったの？」

興奮気味に訊ねるMJのH Gは落ち着いた口調で

「勿論、使える…この子らの母国では護身用に持ち歩いていると聞いたし、先日私達が拳銃の構え方を教えたなら、最初からの当てていたよ…ただし、今回の襲撃で使用した弾はここから持ち出したものだ…でもWT上院議員に届いていない」

「c」

「この子らが使った弾丸は、この店で無銭飲食とか盗難等の犯人に対するマーキングをするペイント弾で、装薬もここからあそこの入り口（と言って、H Gは白山亭の入り口を示して）に向かって撃って当てられる程度、外れたら外の道路にまで飛んで破裂せずに道に転がっていくだけ…こんな風に」

と言って、H Gは現場から回収したペイント弾をバーカウンターに置いた。そして、H Gは

バーカウンターの引き出しを開けて、T Tの拳銃を取り出すと、マガジンを抜いて弾丸を一発取り出して、M Jの前に置き、あらかじめ男屋の工場から持ってきた工具を使って弾丸を薬莢から抜き取り、カウンターに敷いたナプキンに薬莢の中の火薬を出した。

それを見たM Jは

「火薬少な！」

と言って、驚いた。

H Gは続いて、B Xに粘着テープを付けたナプキンを入り口の扉に貼る様に言い、B Xが貼り終わると、レジに隠れる様に言って「撃つよ！」と言って、T Tの拳銃を撃った。

撃った弾は、扉のナプキンに命中し、破裂しナプキンを黄色く染めた。

レジに隠れたB Xにナプキンを扉から剥がして持ってくるように言った。B Xからナプキンを受け取り、

「こんな感じ…ドアのガラスも割れてないだろ？」

と言って、M JとX姉妹に見せた。驚く三人。

A XがH Gに対して

「H Gオーナー、質問です」

「なんだい？」

「ワタシがA Mさんから撃たれた時、右肩に弾が当たりましたが、貫通しませんでした…どうしてですか？」

「…それは、簡単」

と言って、H GはT Tの拳銃をバーカウンターの引き出しにしまい、続いて自分のフロアスタッフの上に来ているジャケットの懐のホルスターから拳銃を抜き、弾倉を抜いてそこから弾丸を一発取り出した。

「これを見てごらん」

とHGが弾丸を指すと

「これって…」

とMJが見てHGに訊ねる。

「対テロ用の強化ゴム弾、当たっても衝撃は来るけど、人体には貫通しない」

「…これが、ワタシに当たったの？」

「そうだよ、私を始め、ウチのエージェントは皆この弾を使っている。当然AMもね」

「だから、体に入らなくて出血せずに済んだのね」

「そうだよ…よかったな、ホローポイント弾（鉛だけの弾丸、人体に入ると潰れて傷を広げる）じゃなくて」

とHGが言うと、AXはHGの後ろから抱き着いた。

「…さてと、一つ取引しようかMJさん」

「何ですか？」

「あんたは、ウチのAMをあなたの拳銃の暴発事故と言う事だが、怪我をさせた。私はAMに言い聞かせてあんたに対する被害の告訴をさせない…まあAMもそれは望まんでしよう

…あんたは、ここに居るX姉妹の襲撃と顔を見ている。当然発砲も…私はこの子らに拳銃を盗まれた…しかも貴重なコレクションを…」

「何が言いたいのですか？」

「肝心のWT上院議員は、本国に召還されて、あんたは報酬が貰えない」

「？」

「でだ…あんたがWT上院議員の襲撃について黙っていてくれれば、私はあんたがA国に帰る飛行機代を出してもいいのだが…なにせ、あの現場を見たのが、あんたとウチのAMと

この子達…それとW T上院議員…でも当のターゲットの本人は国に召喚され、この子達が撃った弾は届かず…私はこの子らにコレクションの銃を持ち出され…A Mは事故で怪我をして…」

とH Gがクドクド言う

「はいはい、分かりました。もうやめて！」

と、M Jが両手を上げると、

「ワタシは国に帰ればいいわ…ワタシ達は何もありませんでしたー。これでいいんですよ」

「はい、よくできました」

とH Gが言う、M Jは

「えげつないわねえ」

と言った。

「…よくそんな皇国語知ってるね」

「A Mから教わった…」

● パパと呼ばないで！

H GはH YとX姉妹を連れて、港の岬に連なる丘の中腹に展開している共同墓地に行った。そして、ある墓の前で立ち止まり、

「このお墓は、白山亭の母屋と碇屋で亡くなった女給や娼婦達を埋葬している…墓石に名前が刻んである…えーと、お前さん達のひいひいおばあさんの名と亡くなった年は…」

と、言いながらH Gが確認すると確かにその名が墓石に刻まれていた。

「ここに名があるな…と言う事は、お前さん達のひいひいおばあさんはここで眠っている」

とH Gが言うと、双子はその場で膝づいて手を合わせた。

「お前さん達…これからどうするつもりだ？」

とHGが訊ねると、AXが

「ママは無くなりましたし、パパは殺されました、I国に帰っても、大叔父さん以外は誰も身寄りはありません。敵討ちは果たせませんでした、WT上院議員は捕まりました。農場が戻っても、ワタシ達には経営する知識がありませんし、今も紛争のゴタゴタで危険な国ですし…とは言っても、この国でもワタシ達はこの先頼れる人は居ません…」

「ワタシ達どうしたら…」

と言つて、X姉妹はお互い抱き合つて泣き始めた。

「あゝあ、泣かせちゃった！」

「うるへ、HY」

抱き合つて泣きじゃくるX姉妹を見てHGは、頭を掻きながら

「あゝ、めんどくせー」

と言つた。それを聞いたHY

「マジッ！（ここで言う事は…まさか…）」

と驚いた。

「お前さん達が、白山亭に縁がある事がはっきりしたんだ。ひいお婆さん同様俺が保証人になつてやる。今まで通り大学に通え…アパート代が負担になるなら、母屋に住まわしてやる。

ただし学費は自分で稼ぐ事！」

とHGは言つた。それを聞いて

「HG社長…いえ、オジサマ…いや、パパ！」

と言つて、X姉妹はHGに抱きついた。

「…またかよ」

と呆れるHGにHYは

「あらあゝ可愛い子供が出来たわね。准尉…いえパパ！」

と、ジト目で見る。HGはHYに

「こいつら、弟子じゃねえぞ！ひい婆さんの残した白山亭関係者の遺児の面倒をみるだけだ」

「似たようなものですよ…母屋の住人になるのなら…」

と言うが、HYはいつもの『食費とか光熱費とか食事の当番割や風呂やトイレの清掃の当番割とか色々増えます』等とクドクド言わずに笑顔で言った。

●隠し子疑惑

HGはX姉妹について、二人の高祖母と曾祖母について嫌々ながらISに問い合わせた。

数日後、白山亭に来てバーカウンターの席で白山亭海軍サンドウィッチをつまんで白山亭オリジナルコーヒーを飲みながら、ISはX姉妹を前にして、

「このお二人は、HG社長の親戚にあたりますな」

とシレつと言った。

「「はいー？」」

驚くHGとX姉妹に、ISは

「お二人の曾祖母は、HG社長の曾祖母の養女になってますよ。当然皇国の永住権はありますし、曾孫さんの永住権も保証されていますな」

「なんだとー（親戚が増えたー）」

と、HGはISからの話を聞いて愕然とするが、X姉妹は喜んで

「「パパ」」

と言ってHGに抱きついた。HGは二人の保証人と親代わりをあらためて引き受けた。

それをH Gの隣で聞いていた、K府県領地の任務から帰ってきたI Yは、（親父…私の居ない間に子供作って…って、本当に隠し子じゃないの？父上（B侯爵）みたいに…）と疑り、T Tは（今度は年増キラージじゃなくて、この子達…実は准尉の隠し子じゃないの？母親は誰？）と訝しがる。

T YとI Aは、

「「可愛らしい子、将来のエージェント候補者ね」

と喜び、M Pは

「可愛くて、その内、なんか色々負けそう…ネ」

と苦笑いした。

A Mは、

「准尉！隠し子とハッキリ言っして下さい（笑）」

と笑顔で言った。

数日後、X姉妹は正式に母屋の住人になった。部屋はM Pの隣。

H YはX姉妹に母屋の幽霊話をするが、戦場となった母国でもっと凄まじい光景を見て育ってきたので、

「そうなんですか？それでパパ（H Gの事）は『ウチの警備システムは優秀なんだ』と言ったのですね…幽霊まで使うなんて、えげつないですね」

とシレつと言った。それを聞いて、H Yは頭を抱えた。

…ここにI Yが居たら、母屋の霊達が鎮いてるのが視えていると思う。作者

いつもの白山亭…

「「ごっごっごませ」」

「…あら？（まあ…なんて可愛い銀髪碧眼の双子ちゃん）」

「「ど」うしましたか？」

X姉妹に上目遣い（HY直伝です。作者（笑））で見つめられて、KTはドキッとして

「いつ、いえ…」

「いらつしやいませ、KTさん」

「あ、Kお嬢様」

「バーカウンターの席ですね。ご案内します」

「ありがとうございます」

B Kが白山亭でアルバイトしているのは度々の事にも関わらず、B侯爵邸内とは立ち位置が逆転しているので、未だにTKはギクシャクする（実家では主人と使用人の立場が反対です。作者）。

「お嬢様、あの方々は？」

「はい、X姉妹と言って私の大学のお友達です…最近HG社長のお身内と判ったそうで…彼女達はHG社長の事を『パパ』と呼んでいます」

「謹慎が解けて久々に来たら…まあ…HG社長…お子様がいらしたのね…こんな銀髪碧眼の双子の可愛い女の子…母親は誰ですの！（キ、悔しい！）」

と、勘違いするTKの悔しそうな表情を見たTT、

「なんでやねん！（笑）（Kお嬢様、ナイスボケです！）」

と突っ込みを入れた。

その頃、HGは葛葉組の事務所に呼び出されていた。

「おい、HG。なんでも外人の隠し子が居たそうだな」

とニヤニヤして言うDA親分に、

「…違います！」

「なに、照れてる…儂に隠す必要はないぞ」

「違います！あの娘達は、私と親父さん同様にひい婆さんの子孫です」

「なにー？どういう事だ。外人の親戚なんて聞いてないぞ、じゃなんだ、ひい婆さん、外人と浮気したのか？…やるじゃないか、ひい婆さん！」

D A親分の言葉にH Gは（それ…母屋に居るひい婆さんの霊の耳に入ったら、殴られると思う…多分）と思った。

「違います！」

「じゃ、説明しろ、H G！」

「これから、説明しようとしたのに、言うんだもんさ」

「じゃ、早く説明しろ！」

「あの子達の曾祖母は、我々のひい婆さんI Nの養子なんだそうです。またこの子らの高祖母は白山亭の初代シェフだそうです」

「なに？」

「あの子達の高祖母はI国の人で、身重のまま戦場となったI国から逃れて、Y国際港に上陸して路頭に迷っていた所をウチのひい婆さんに助けられて、生まれた子供があの子達の曾祖母だそうです。その後あの子達の高祖母は、ひい婆さんの始めた白山亭の初代シェフとして、ひい婆さんを助けたそうですが、流行り病であっけなく病死しました。残されたあの子達の曾祖母を引き取り、養女として私のお婆さんと一緒に学校に通わせ、また白山亭の女給として働いてお金を貯めて、大人になった時に母国のI国に返したそうです」

と言って、X姉妹の持っていたお守りのコピ―を見せた。

D A親分はH Gから渡されたコピ―を見て

「ホントだ…ひい婆さんの名I Nと記してある…」

と驚いた。

「…と言う事は…H G、お前の婆さんの…」

「戸籍上は二つ上の姉にあたる人になりますな。婆さんは末娘ですから」

「その曾孫達を養子にしたんだ」

「いえ、保証人になっただけです」

と、H Gは真顔で否定した。

「そういうことか…儂らもなにかあつたら面倒をみるよ」

「はい…ありがとうございます」

葛葉組の門を潜り、白山亭の仕入れ発注の為にR交易商公社事務所に立ち寄る。

「よっ、H G隠し子いたんだってな！」

「な！R Rお前まで…」

「娘のSから、〃I Aが、H Gに隠し子が居たって〃言ってたと…」

「I Aめ…(怒)」

「違うのか？」

「違う！俺の婆さんの戸籍上の姉の曾孫達だ。母国のI国の両親が亡くなったので、俺が保証人になっただけだ」

「なーんだ」

と残念がるR Rに横で、H Gにお茶を出すR Lが

「えっ、そうなの？H Gさん、あんなに可愛いのに…いっそ、正式に隠し子と認めたら？」

「えーい、違うわ！」

「じゃ、養子に迎える事ね」

「Lさんまで…(泣)」

● I N の遺児整理

H G が D A 親分の所に行った数日後：

「いらつしやいませ。商店街会長さん」

「おう、I Y 今日可愛いね」

「やだ、もう…ありがとうございます」

「カウンターの席にしてくれ」

「はい、畏まりました」

Y 国際港駅前商店街会長である D A 親分は、バーカウンターの席に着く。T T が

「いらつしやいませ、商店街会長さん。お飲み物は何に致しますか？」

「おう、T T 相変わらず綺麗だね、白山亭オリジナルコーヒーをくれ、あと H G を呼んでくれ」

「はい、ありがとうございます。白山亭オリジナルコーヒーと社長ですね。畏まりました（准尉も、たまにはこれくらい言ってくれと嬉しいけど…）」

と言つて、T T が内線電話をかける。

「准尉、商店街会長さんがいらつしやいました」

『わかった、すぐ行く』

T T がコーヒー豆をグラインダーにかけ、その間サイフォンを用意していると、D A 組長は

「T T さんや、あれが H G の隠し子達か？」

と、店内で給仕している銀髪碧眼の双子の X 姉妹を見て言った。それを聞いて、T T は一瞬コケルが、冷静に

「…はあ」

と、曖昧な返事をした。他の常連であるTKやMZ達に対してなら、今の質問をされると「はい、そうです。可愛いでしょ！」と笑って応じるところであるが、相手がHGの親戚のDA親分なのでどう返していいのか分からなかった。

「あ、いらっしゃい親父さん」

と言って、バーカウンター横の従業員出入り口からHGが入って来た。

「おう、HG。持って来たぞ」

と言って、DA親分が手を挙げた。

「出来ましたか」

「おうよ、これだ」

と言って、DA親分がHGに「調査報告書」と書かれた書類を渡した。

HGはそれをパラパラとめくり、

「わざわざ、ありがとうございます」

と礼を言った。

「いや、ここいらで一度整理しようと前から思っていたから、丁度いい機会だった」

「そうですか」

と言って、HGは微笑んだ。

「准尉、それは…」

とTTが訊ねると

「ああ、これは俺達のひい婆さんの子供の家系に関する調査報告書と、旧白山亭ならびに旧碓屋の従業員に対する報告書」

「ン？」

TTが小首を傾げた。

「いや、あそこの子鼠達（X姉妹）の件で、まだひい婆さんの関係者が出てくると思って、親父さんに相談したら、親父さんも調べている最中だったんで、調べが終わったら報告書を頂く事にしたんだ」

「あら、そうですか」

「ああ、農らのひい婆さん…ANさんの子孫を整理しないと、相続とか揉めるからな…もつとも、白山亭に関しては、農らHGに譲り渡しているが…」

…HGとDAの曾祖母NはA味噌醤油店から三度結婚して、その多くがY国際港商店街に居ます。作者

「へえー、で、どうなんですか？」

とTTが訊ねると、HGは報告書を捲りながら。そのあるページを開いて

「親父さん、このページでいいんですか？」

「どれ…ああ、そうだよ」

と言ったので、HGは

「オーイ、A・B、ちょっとおいで」

「「ハイ」」

X姉妹がバーカウンターに来ると、HGは

「二人とも、この人はこのY国際港商店街の会長さんのDAさん…親戚にあたる人だよ」

「二人供、初めまして、農はDAと言って君達のひいお婆さんを養子にした人の長男の曾孫にあたる。屋号は『葛葉組』と言って、任侠集団の親分と商店街会長をしている」

と自己紹介をすると、X姉妹はDAの説明が理解できず、取り敢えず親戚らしいことが判り、作り笑顔で

「ワタシはAXです」「ボクはBXです」「よろしくお願いします」

と挨拶した。

「可愛いのう…」

と言ってD A親分は目を細める。

「お互い、紹介は終わったので、二人供聞いてくれるかな」

「はこ」

「君達の事があったので、一度我々のひいお婆さんについて整理して貰ったんだ」

「はこ」

X姉妹は小首を傾げた。

「俺とここに居るD Aさんのひいお婆さんは、ちょっと普通じゃない人生を歩んだので、複雑になっているんだ」

「はこ」

「まず、ひいお婆さんは、この店の横にある運河の向こうにあるA味噌醤油店からここに言うD Aさんのひいお爺さんの家に嫁入りした。そこで五男三女の子供が生まれ、その一番上の長男の孫がD Aさん。その後夫と死に別れ、次にJと言う人と再婚して、三男二女の子供が生まれ、離婚して、次にIと言う人と再再婚して、三男一女の子供が生まれ、夫が病死して、生活の為にこの白山亭を始めたんだ。そのI姓の一人娘で一番下の末娘が俺のお婆さん」

「えへ、何言ってるか、分かんない」

とX姉妹が言うと、

「…ま、そういう反応になるかな」

とH Gは仕方が無いと言った表情をしてため息をつく、

「君達が関心を持つ事だけ言うと、俺のひいお婆さんが白山亭を始める前に君達のひいひいお婆さんと出会って、俺のひいお婆さんの家で子供を産んで…君達のひいお婆さんの事ね…白山亭を開業後、その人が亡くなったので、君達のひいお婆さんを養子に迎えた。子供の順番で言うと、俺のお婆さんの直ぐ上…」

とHGが言う

「「そういう事ですか」

と、ようやくHGが話してる事がなんとなく理解できた様だった。

TTは

「准尉とY国際港商店街に居る御親戚の方々とは、そういう関係なんですね…私も分かったような、分からないような…」

と言った。それを受けて、HGが

「だろ？で、この二人みたいにひいお婆さんのINがまだ養子を迎えてる気がして、調べようと親父さんに話を持ったら、親父さんも調べていたので、報告書をもらう事にしたんだ」
「そうですか」

「いや…僕もこの報告書は、この街の親戚一同に配布する気でいたからな」
とDA親分が言うと、

「それで、准尉、今そのひいお婆さんのご子孫と養子の方は？」

TTは興味深々…

「ひいお婆さんの子供が十七人…養子はX姉妹のひいお婆さんの他に一人…その人も女性」
「やはり、他にも養子が居たんですね」

「俺の想像では、もっと居ると思ったんだが…」

「えっ？」

「この二人の事を考えると、碇屋の娼館時代に娼婦が産んだ子とか引き取っていきそうな気がしたんだ」

「ええっ？」

「それは、別のページにあるが、孤児院を建ててそこで育てたり、母子家庭として暮らす元娼婦の生活を援助していたしていたそうだ。外国から来た人でこの子達のひいお婆さんの

様に白山亭の従業員で不幸にして亡くなった人の子供については、養子に迎えたようだな」とDA親分が言うと、TTが

「…その孤児院は、今？」

「女性の地位・権利向上を目的とした法律に基づく赤線取り締まりにより、女給兼娼婦の娼館部門は廃止された後、孤児院には子供が数人残ったが、白山亭で面倒を見て世に送り出したそう。孤児院の建物は岬に続く丘にあったそうだが…土地は農家のもので建物は、今は保育園になっている」

「そうですか…良かったです」

と言って、TTは涙を流した。

「今思えば、黒歴史だな」

とDA親分が言って、HGとDA親分は俯く。

「それで、養子の人は？」

とTTが訊ねると、HGは報告書を見て、

「ああ…E連邦に…やはり、母国に返したようだね…以後追跡不可能か」

●エピローグ、まだ居るの？

「社長、なんでもの人達をアルバイトに雇って、わたしは雇ってこないんですか？」

と、アルバイト志願の女子学生がバーカウンターを両手で叩いて、HGに詰め寄る。HGは平然と

「いつもお断りしていますように”縁故の紹介状が無い者は、アルバイト応募お断り！”と、張り紙してある通りです」

と言って、HGはレジの後ろの壁に『白山亭の歴史』と書かれたパネルと共に掲示してある張り紙を指して言う。

「では、あの子達は縁故があると言うのですか？外国人ですよ…確かに外国の方の女給さん（MP）は居ますが、それは社長の別会社の方ですよ。ではあの人達も社員ですか？」

と、女給服を着て店内で接客しているX姉妹を指さして言う

「いいえ、あの子達はアルバイトです」

HGは平然として答えた。女子学生は納得がいかず、

「では、どの様な？」

「はい…あの子達の高祖母と曾祖母がこの店で働いていたと言う事が確認できましたので…更に、曾祖母は当家で生まれ、後に創業者の養女になりました。当店百年の歴史から見れば、十分あり得ます…今は私があの子達の親代わりです。ちなみに、社員の彼女もやはり祖母と大伯母がこの店でやはり働いていました。創業家の一族としましては、創業者の雇った女給の子孫は希望すれば、創業家が面倒を見ることにしております…それが何か」

と、HGがシレつと言うと、女子学生は

「ぎゃふん！」

と言ってすぐごと帰って行った。それと入れ違いに、

「いらつしやいませー…ってMJさん…」

とX姉妹が応対した。

「ハア伊！双子ちゃん！HGオーナー居る？」

「ハイ！バーカウンターの席にどうぞ」

バーカウンターで仕事をしているHGがMJを見て驚く、

「ハア伊！HGオーナー」

「あれ？まだこっちにいるの」

「うん、A国に帰って仕事してるより、こっちの方が面白そうだから」

「…面白そうって…」

「ワタシもこの街で仕事しようかなー、仕事あったら紹介してね」

「ハイハイ…あつたらね」

「それとも、A M 同様雇ってくんない？ 実力は、体力以外はA M 並みよ！」

「それは、いいかも…」

「准尉！ また、勝手に弟子を増やそうとする…わたし達に断りもなく…弟子を増やすと、食費とか光熱費とか食事の当番割や風呂やトイレの清掃の当番割とか色々増えますよ！」

と言つて、H Y はむくれた。

「いいじゃねえか！ それだけ当番をする回数が減るだろ…金は借金返した今は、投資に回すべきだし」

「そんなことしたら、E Y とN A まで押しかけてきますよ！ E M 大尉やI T 隊長に恨まれます！」

「巻き込まれ親父の女難 Ⅱ 完Ⅱ」